



By Source, Fair use,
<https://en.wikipedia.org/w/index.php?curid=32400038>

モハメド・ディブ（ムハンマド・ディーブ、Mohammed Dib）は、一九二〇年にアルジェリアの古都トレムセンに生まれ、一九五〇年代に頭角を現したアルジェリア作家の第一世代に属する。二〇〇三年にパリで没するまで半世紀にわたって豊かな執筆活動をし、アルジェリアで最も敬愛される偉大な詩人・小説家となった。

『大きな家（*La grande maison*）』（一九五二年）を嚆矢とする「アルジェリア三部作」は植民地末期のアルジェリア人たちが貧しい暮らしの中で新しい意識に目覚めてゆく様を描き、来るべき革命を予見する。アルジェリア戦争中（一九五四—一九六二年）に発表された『アフ

リカの夏（*Un été africain*）』（一九五九年）は独立運動を背景に若い女性の自我の揺らぎを前景化し、本邦でも一九七八年にアジア・アフリカ主義の文脈で翻訳されている。その後、『誰が海を憶えているのか（*Qui se souvient de la mer*）』（一九六二年）以降、文体はレアリズムの圏域を離れ、『ハベル（*Habel*）』（一九七七年）、『スィーモルグ（*Simorgh*）』（二〇〇三年）などの極めて詩的で難解なテクストを紡ぎ出すことになる。一九九四年には、アカデミー・フランスのフランコフォニー大賞を授与された。

ここに訳出した「旅人」は、独立戦争直後の一九六六年に出版された短編集『タリスマン（*Le Talsman*）』の最後から二つ目の短編だが、書籍と同名の最後の短編「タリスマン」の方は、アジア・アフリカ作家会議の国際文芸誌『ロータス』にも掲載され、おそらくその流れで野間宏責任編集の『現代アラブ文学選』（一九七四年）に訳出されている（日本語タイトルは「呪文」）。戦争で殲滅された村に死者の魂が帰還して語るという結構の独自性が高く評価される「タリスマン」だが、その語りの無名性と自我の集合性もまた従来のヨーロッパ小説とは一線を画するものだろう。

「旅人」は、察するに独立戦争中のアルジェリアの港町が舞台で、ビストロを営むマルタ人ルイと客の「旅人」との要領を得ない会話が描

かれるだけの作品であるが、読み進めていくと、どうやらこの「旅人」はフランス本国から送り込まれた職業軍人らしいことが分かってくる。ここで効果的に用いられているのが一般的な「人」を表したり一人称複数 nous の代わりに用いられるフランス語の特殊な主語人称代名詞 *on* であり（「俺たちは」「人は」などと訳出）、それは崩れゆく「フランスのアルジェリア」のヨーロッパ人であったり、フランスからやってきた軍人たちであったり、微妙なニュアンスでその外延を変化させていく。敵と味方も判然としないゲリラ戦下のアルジェリアはまた統合されざる人々の坩堝であり、そこにうごめく輪郭もはっきりしなければ可塑的でもある集合性が、珍しくもヨーロッパ人の会話を通してほんやりと浮かび上がってくることに卓越した技量が見てとれよう。

二十世紀の前半にはむしろアルジェリアのヨーロッパ系住民を指した「アルジェリア人」というアイデンティティを先任のアラブ・ベルベル人が自らのものとして獲得していくのがアルジェリア・ナシヨナリズムの歴史であり、植民地支配下に胚胎した彼らの「ワタン」に誰がどのように参画すると考えるのかは現代に至るまで議論が絶えない。極端な例で言えば、当地の二千年の歴史に参与した諸民族とその言語のすべてをアルジェリアの構成要素とみなす者も

いれば、アラブ民族とイスラームに根拠を求める者もいる。何より植民地時代にアルジェリアで生まれ育ったヨーロッパ人をどのように位置付けるのかは意見の大きく分かれるところだろう。

ディブが「旅人」で描いているのは、「アルジェリアは誰のものか」「アルジェリア人とは誰か」という問いが武力闘争の中で問われつつも、単なるアラブ人とフランス人の対立に回収されない複雑な襲を持った社会の様相である。おそらくフランス市民権を持った「アルジェリア人」であるマルタ人ルイにとって、「本国」からやってきた軍人は（外人部隊でなければ）フランス国籍を共有しつつも「アルジェリア」の外部者であり、従業員のサイドは「原住民」であれど息子同様で自分の側の人間である。渦中の人物それぞれにとってワタンの風景は異なっている。見えるだろうし、その姿はまた刻一刻と変化しているのである。



アルジェの海岸
"Algiers Shore" by Sidkumar23 is licensed under CC by 2.0



国立図書館から望むアルジェリア独立戦争殉教者記念塔